

街場の就活論 vol.12

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ
団 遊

今回は、アソブロックで実施した中途採用を振り返ってみた

今回は先日実施して反響が大きかった、私が代表をつとめるアソブロックの中途採用活動について、自身で振り返ってみようと思う。

まずはいきなり結論から。今回の採用をしてみて感じたことをまとめてみた。

・思いのほか多くの人が、「お金を稼ぐこと」以外の働く動機を真剣に探している

・条件（福利厚生）、仕事内容以外の訴求で十分採用はできる

・この事実は、採用に苦しむ対人援助領域にも応用できる可能性がある

ということで、それを感じるに至った経緯を書いていきたいと思う。

アソブロックって？

アソブロックは社員10名ほどの小企業だ。プロデュースを主業としているが、組織体系が少し変わっている。社内に4人のプロデューサーがおり、

それぞれにディレクター、アシスタントディレクターをつけてチーム単位で仕事をしている。ありていに言えば事業部制ということになるが、それぞれのチームが完全に独立する形態をとっている。小さなことでいうと、入社時間、大きなものでは給与体系までが、それぞれのチームごとに考えられている。つまりチームをひきいるプロデューサーは、社長と言って過言ではなく、アソブロックという母屋の中に4つの会社が共存しているといえる。

事業ドメインも、それぞれのチームで設定して動くため、極端な話、隣のチームが何をしているかわからないことも多い。私のチームは、主に対人援助領域、それも幼稚園や保育園へのサポートを中心に仕事をしているが、隣のチームはアイドルのプロデュースをしている。一見するとはちやめちゃであるが、事業内容を会社の中心に置くのではなく、人を中心に考えているだけのことだ。

ただし、アソブロックらしさというものは共有しており、それは「変化と刺激のものづくり」という言葉に集約される。つまり、作ることを目的にするのではなく、変化を起こすことを目的とすること。単なる「制作請負」な仕事はしないとい

う決意だ。



※南木チームがプロデュースする「ゆるめるモ！」オリジナル曲もあり、ファンが着実に増えている

もちろん人事権も各チームのプロデューサーが持っている。そのため、一応全体の代表を私がつとめているが、採用後、初出社の日に、「はじめまして、今日から安井チームでお世話になる泉です」と挨拶されるのが初対面ということもある。

今回の中途採用は「団チームにおける私のアシスタントが欲しい」という狙いであったため、入社を受け皿になるのはアソブロックだが、採用するのは団チームということになる（ちなみに新卒社員はアソブロックで採用し、協議の上でチームに配属している）。

つまり、極端な話、今回の採用は僕が採りたい人を勝手に採ればいいということだ。そこでまずは広報手段から悩むことにした。これまでのように、リクナビやマイナビといった大手メディアに掲出すると、アソブロックの社としての採用と見えてしまう。でもそれは事実のようで事実ではない。そこで、最近はやりのソーシャル型採用

「Wantedly」に掲出してみることにした。

まずは「Wantedly」

Wantedlyはフェイスブックなどと連動する採用ツールで、「***な人wanted」と募集を出す。すると、興味のある人がレスポンスをくれる。そのレスポンスは、興味の度合いによってチェックボタンが異なっており、「話だけは聞いてみたい」レベルから「すぐ面談したい」レベルまで様々だ。

募集する側は、その人の熱意に応じた対応をする必要があり、「話だけは聞いてみたい」人に突然「面談日の通知」などと送りつけると、失礼にあたってしまいうらしい。

らしい、というのは、そのようなミスを実際にしてしまい大変怒られたので、体験的に「失礼なのだ」ということを知った。そのため、オペレーション側からすると、少々面倒だともいえる。

また、ソーシャルの世界なので、まったく興味の持てない人であっても、レスポンスに無反応（放置）はご法度である。結果感じたことは、これは結構めんどくさいということだった。



※利用料無料が何と言っても嬉しい

そこで、「日本仕事百貨」

大手メディアに掲出するつもりはないものの、やはり何かメディアに出して求人をしないと、思うように情報は流れない。そう思いながら色々見ている中でひっかかったのが、日本仕事百貨というサイトだった。

このサイトは正確には求人サイトではない。そのことは、後日担当者から何度も念押しされたのだが、彼らが一義に考えていることは、以下のようなことだ。

- ・日本にはまだ人に知られていない仕事がたくさんある
- ・色々な仕事を知ることは、その人のキャリア観の育成にもつながる
- ・仕事を知ってもらうことは、従事者へのエールにもなる
- ・だから色々な仕事を紹介するサイトを作っている
- ・それが日本仕事百貨というサイト
- ・ちなみにオプションで求人ボタンもありますヨ

つまり、求人機能はあくまで付属に過ぎないのだ。だから担当者も「団さんが興味を示してくれたのは嬉しいですが、応募効果（＝求人応募数）は期待できません！」と実に力強い。

しかし、そこがおもしろかった。もともと、私のアシスタントを募集することが目的なので、応募者数にこだわりがあるわけではない。ニーズにマッチしない人が何百人も来るよりも、ずばりの人ひとりと出会うのが、効率的かつ有効な募集方法なのだ。実際に、新卒採用サイトに求人をあげたりすると、うちのような会社でもエントリーが

数千集まってしまう。はっきり言って手に余る。

そこで「それで結構です」と返事をし、このサイトに記事を出すことにした。大切にしたのは、団遊と一緒に働く人の募集であることを、きちんと伝えることである。かくして取材当日、同社のライターがやってきて、約2時間取材を受けた。



※たぶん知っている人はほとんどいない

おもしろかったのが、団遊と一緒に働く人を募集するのだから、団遊がどんな人かだけ聞いていきます、と言って仕事内容にほとんど触れなかったことだ。

こういって、「仕事を紹介するサイトではないのか？」と突っ込みを受けそうだが、「団遊と働くという仕事」を紹介しているということで、何ら問題はないらしい。つまり、事業やドメインに従事する仕事ではない「人」に属して働く仕事もあるのだ、ということの情報提供らしい。

かくして出来上がった原稿が次ページからのもことになる。実に興味深いので、ぜひ読んでみてもらいたい。

ヨノナカ編集者

今回は、会社ではなく個人のもとで働く人の募集です。経営者でありプロデューサーである団遊(だん・あそぶ)さんのパートナー&アシスタントを探しています。

団遊さんについて、一緒に働くスタッフさんに聞いてみると、「落語家みたい」という答えがかえってきたけれど、まさにその通りだと思う。とにかく話が面白い。

団さんは、そんな自分のキャラクターを看板にして、自由自在に、遊ぶように仕事をしているように見える。

ただ、話を聞いているうちに分かってきたのは、たんに面白いことをしているわけではないということ。依頼してくれた相手のことを考え、ベストを尽くす。その結果、事業が生まれる。

団さんがいちばん大切にしているのは「人」であって、事業そのものではない。その姿勢に共感して、一緒にプロジェクトの形をつくっていきけるような人に来てほしいと思います。

東京・港区の住宅街のなかにある、団さんのオフィスに伺った。一軒家を改装した建物の1階には「ea(エア)」というデザイン会社、2階には「アソブロック」というプロデュース会社が入っている。両方とも、団さんが設立した会社。だから団さんは、ここで作業や打ち合わせをすることが多い。新しく入る人も、ここで仕事をする可能性が高いと思う。

昼の応接室で待つこと数分。団さんがやってき

た。最初に、気になっていたことを聞いてみる。

団遊(だん・あそぶ)は、本名ですか？

「本名なんですよ。『長男だからよく遊べ』と、親がつけてくれた名前です。学生時代なんかは、この名前のせいでからかわれて酷い目に合わされましたよ。社会人になってからも、『日本は長いんですか？』って中国人と間違えられたり、書類に記名するときに『名前は本名で書いてください』と言われてたり。名前の話なら、それだけで一時間は話せるんちゃいます？とにかく色々なことがありますねえ」

ほかにも、名前にまつわる逸話を沢山教えてもらった。

学生時代は苦しまされた名前だけれど、今はむしろその逆。「団遊」という名前自体がブランドになり、仕事の受付口にもなっている。

そうだ、団遊に頼もう！そんな風に日々依頼がやってきて、プロジェクトが立ち上がる。団さんのまわりにはいつも、面白いことが同時進行中。

「色々やってるね、また何か新しいことはじめたね、とよく言われるんだけど、それはちょっと誤解があるんですよ。というのも、僕は事業自体には何も思い入れがないんです。プロジェクトがなくなっても、明日会社が倒産したとしても、どうでもいい。それは、事業ではなく、人との関係性に思い入れがあるからなんですね。相手にとって良いことをしたい。本当にそれだけなんです」

例えば、「ホンブロック」という出版社を立ち上げたのは、メッセージを伝えたい人がいるから。はちみつブランド「8bees」を立ち上げたのは、国内の養蜂家たちの活動を広げるため。どれも、や

りたいからやるのではなく、相手がいるからやっている。だから、事業自体が消えてもなんとも思わない。

こういう「人」に根ざした仕事のやり方は、どんな風に生まれたのだろう。団遊というブランドはどうやってできたのだろう。

団さんが、大学時代に遡って話をしてくれた。

「スキーのデモンストレーターになりたかったんだけど、大怪我をして挫折したんです。今度は小説家になろうと思ったけど、文学賞にことごとく落選してそれも挫折。そんなときコンビニで雑誌を読んでいたら、ライターという仕事があることを知ったんです。文章でお金がもらえるならやりたい！そう思って、大阪中の出版社を回り、自分を売り込みました」

ある出版社に面白がられ、出入りさせてもらうようになる。そこで虎視眈々とチャンスを狙い続けた。

そしてついに、原稿を任されることになる。

そこからは早かった。瞬く間に、団さんは売れっ子ライターになる。

「関西の全ての媒体で仕事をしてました。23歳からはじめて2～3年で年収1000万になり、25歳で編集会社を立ち上げました」

嘘のような本当の話。そうして雑誌編集の世界でのし上がった(?)団さんだけれど、あるときまた、転機がやってくる。

「出版不況がやってきて、出版社がお金の話ばかりするようになったんですよ。つまらんな～と思ったとき、これから面白いのは、世の中の編集な

んじゃないか？と思ったんです。豊かで色々なものが揃っていて、みんなが生き方を考えるような時代。今は世の中を整理するタイミングなんじゃないかって」

そう思い立った団さんは、「出版社とは仕事をしない編集会社」を立ち上げた。記事を一切書かない代りに、実際のヒト、モノ、コトを編集していく「アソブロック」が誕生する。

団さんの頭のなかでは、雑誌の編集も世の中の編集もつながっていたのだけれど、一般的に見れば、まったく畑違いの業種。最初は仕事がない状態が続いた。

ところがそのうち、人づてに相談がくるようになる。最初は、無償で依頼を受けていた。それがあるときお金を貰えるようになり、仕事になっていった。

もちろん、成功には団さんの人柄の力も大きいと思う。でも、やっぱりひとつひとつの依頼に全力で応えていったことが、結果的に実を結んだのだと思う。

アシスタントになる人は、そういうノウハウも学んでいけるかもしれない。

具体的には、どんな仕事になるんでしょうか？

「その人がやってみたいことを仕事にしてほしい。出版に興味のある人は出版だし、不動産、施設運営、ブランドづくりに興味のある人だったらそれもある。ある程度キャリアがある人には、そんな提案をしたいと思います。若手だったら、まずは言われたことをやってもらうかたちになるのかな。その人を見て、その人に合ったものを一緒に探していきたいと思います」

例えば、どんな人がいいですか？

「面談を通じて、こいつやったら一丁前になるまで育てたいと思える人。僕がそいつを好きになるかどうか結構大事ですね。生意気で自分の頭で考えられる人なら、僕と合うと思う。『行動力のある哲学者』ですね。座っている哲学者は嫌いだし、考えるより動くタイプです！というのも駄目。ちょうどよく、考えながらも動ける人が好きです」

あとはやっぱり、団さんに興味がある人がいいと思う。大好き！という盲目的な感じは良くないし、むしろ嫌いでもいいそうだ。ただ、団さんと一緒に仕事をしたいと心底思えること。その気持ちがないと、はじまらないと思う。

団さんに話を聞いたあとは、団さんと一緒に仕事をしている人たちにも話を聞いてみた。

まずお話を伺ったのは、安井さん。アソブロックのプロデューサーとして、企業の組織や採用にかかわるプロジェクトを担当している。

もともと舞台のディレクターをやっていたところ、あるイベントの企画で団さんに出会い、誘われる。そして5年前に、アソブロックへとやってきた。

「団は完全な編集者タイプ。人やモノをつなげるのが上手いんです。組み合わせたり、整理整頓する。発明者というよりは編集者という感じがしますね。自分は、そういう編集の領域を学んで仕事の幅を広げたいと思って、ここに来ました」

実際、団さんとお仕事をしてどうですか？

「放置ですよ。アドバイスを求めれば教えてくれるけど、基本的に好きなようにやったら？という

スタンスですね。ミーティングは月に2回しかありません。それが苦しい人は苦しいし、楽しい人は楽しいと思います」

安井さんが、最近会社でキーワードになっている言葉を教えてくれた。それは、「一致団結しない」というもの。

「ひとりひとりが自分の名前で仕事できるように、団結しないで自由にやろう、という考え方ですね。団結していたら、役割分担するから仕事が細分化されてしまうじゃないですか。チームワークに頼りすぎてはいけないという意味も込めています」

会社のメンバーそれぞれが、お互いに知らないまま進んでいるプロジェクトもたくさんある。忙しい団さんと話す時間も、なかなかとれない。

でも、みんな根っこの部分で共通の感覚をもっているから、アウトプットがブレないのだと思う。もし信頼してなかったら、逐一全てチェックして、ルールで縛ってしまう気がする。丸投げしているのは、信頼し合っている証なんじゃないかな。もともと心がひとつだから、あえて団結する必要がないというか。

「ただ、僕はもともと組織のなかにいたので、1人ではできないことも10人いればできる、という団結する面白さも知っているんですね。そういう意味では、もう少し団結してもいいんじゃないかな。団自身も言っていますけど、団はあまり経営者的ではないんですね。マネジメントもあまりしないし。だから、ある程度指示してほしい人は、けっこうしんどいと思います。」

逆に、自分でなんでもやりたいタイプの人には、もってこいの環境だと思う。ここでなら、興味の幅を限定せずに色々なことができる。「これ以上自

由があるとは思えないほど自由です」と、安井さんも話していた。

次に、団さんと一緒にデザイン会社「ea(エア)」を立ち上げた、グラフィックデザイナーのセキリヲさんに話を聞いた。

セキさんは、「salvia(サルビア)」というブランドの商品や本の装丁、広告、パッケージなどさまざまなデザインを手がけている。わたしも、セキさんの本をいくつか読んだことがあった。まさかこんな機会にお会いできるとは思っていなかったもので、びっくりした。

団さんとの出会いを伺ってみる。

「フリーランスで仕事をしていたのですが、わたしが苦手なお金の交渉とか営業とか、そういうことをやってくれる仕事上のパートナーを探していたら、ちょうど出会ったんです。団遊は、わたしにはないものを持っているんですよね。人との関係に長けている人だと思います」

セキさんの得意分野と団さんの得意分野が全く違うところにあるからこそ、ea という会社が成り立っているのかもしれない。

「そんなにノリが合うとは思わないし、全然センスも違うから話が噛み合わないこともある。でも、人としてこうありたいよね、とか、人に対する考え方はすごく似ている気がします」

人に対する考え方、ですか。

「団遊は、一緒に働く人に対して細かいことは言わない。ただその人が成長できればそれでいいと思っています。わたしも割とそうなんです。自分のアシスタントを手足のように動かした

いのではなく、仲間だから、その人が大きくなることを望んでいます。そこは団遊と同じなんだよね」

安井さんとセキさんの話のなかには、団さんが言っていたことと重なることが何度もあった。団さんと、団さんと一緒に働く人たちの関係がとても自由なのは、考え方の根っこが同じだからなのだと思う。団さんの謎がひとつ解けた気がして嬉しかった。

最後に、団さんが言っていた印象的な言葉を紹介します。

「入る人は、所属がアソブロックになるかeaになるか、どうかたちになるか分からない。でも、どこに属してどんなことをしたとしても、『団遊と会えて良かった』と言われたいと思います。事業の成功・失敗よりも、一緒に働くスタッフ自身の成長に繋がっているかどうか、一番大切なんです。嫌いな人にはそんなこと思えない。売り上げマシンのように働かせてしまう気がするな。だからこそ、本当に好きな人と一緒に働きたいと思っています」

(2013/1/16 ナナコ up)



※こんな風に掲載されていた (今もされています)

いかがだろうか？

確かに従来型の求人原稿とは一線を画したものになったと思う。一番大きいのは「何をするのかさっぱりわからない」ということだ。かくして、この求人は1月16日にwebサイトにUPされた。

ひとつ予想外だったのは、この求人自体が、特に僕のことを知っている人には大変興味深かったらしく、かなりソーシャルで拡散したことだ。

そして初日

あれほど力強い言葉があったにも関わらず、応募がやってきた。これには総務・人事担当のやまちゃんもビックリで、至急の対応を迫られることになった。間を置かず次、また次と、応募はとどまることを知らず、結局掲載期間2週間で約200人の応募を受け付けることになった。これは日本仕事百貨としてはかなり多い部類らしい。

私はその様子を見ながら、一体これは何だろうと不思議でならなかった。書いてあるのは、仕事へのスタンスであって、団遊とはどういうタイプの人か、ということの一部に過ぎない。にも関わらず、ちゃかしているとは思えない、想いが書き連ねられた応募が次々と届く。潜在的ニーズを掘り当てたような感覚があった。

本当は応募者全員と面談してみようと思っていたけれど、結局残念ながら書類審査をすることになった。そして、150通を超える履歴書と向き合ううちに、さらにいくつもの興味深いことに気がついた。

まず、圧倒的に30~40代の女性が多いこと。非婚者の比率が高いこと。それらの方は年収も比較的高く、キャリア意識も高そうであること。そし

て、それらの方が異口同音に「自分を変えて、経済循環の中から少しはみ出した仕事をしてみたい」と思っておられたことだ。

中には「なぜ…」と目を疑いたくなるような、いわゆる男性エリートからの応募もあった。現在年収が1,000万円を優に超える人が、日本仕事百貨を通じて団遊のアシスタントに応募する。これも、僕には理解し難いことに映った。

結局…

私は33歳と38歳のふたりの女性を採用することになるのだけれど、今回のケースを通じて、採用のアプローチを変えることで出会える人が変わってくることを痛感した。

きっと大手メディアに出していたら、今回採用できた女性たちとは出会っていなかっただろうし、個性的な人が集まった40人の面談にもならなかったであろう。

もちろん、アソブロックや団チームが、いつも採用に困っていないわけではない。どちらかと言えば、通常は小企業らしく、「なかなかいい人に出会えないね」と言い合っているケースの方が多い。ところが、今回の募集では「本当に!？」と疑いたくなるような人からの応募が多かった。

募集の広報を変えたからと言って、仕事内容が変わるわけではない。だが、出会える人は確実に変わる。

世の中には、「人が採れない」と嘆く組織がたくさんあるが、案外ボトルネックになっているのは、硬直化した採用広報手法にあるのかもしれないと、今回の経験を通じて感じたのであった。

文／だん・あそぶ

立命館アジア太平洋大学非常勤講師

「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にした授業を展開している。代表をつとめるアソブロック株式会社では、幼保の環境づくり支援事業を行っている。ほかに出版社、はちみつ屋、アパレルブランド、島興し、地域活性など、多数のプロジェクトに取り組んでいる。最近は自らリスクを背負って動くことがブーム。ただし失敗も多い。